漢語湟源方言の舌尖母音化について

川　澄　哲　也*

1　序

漢語諸方言には、「舌尖母音（apical vowel）」と称される、狭母音よりも舌の位置が高く、そのために摩擦的噪音を伴う母音が存在している。この種の母音は筆者が研究対象とする青海省の諸方言*1 でも使われるが、以下の表 1 からも窺われるとおり、青海方言では他の方言に比してより多くの字に舌尖母音が現れる。

表 1）

例字 / 都市名	私	地	七	一	迷	皮
西寧*2	sɿ^{44}	tsɿ^{24}	tʃʰʐ̩^{44}*3	ʐ̩^{44}	mʐ̩^{24}	pʰʐ̩^{24}
楽都*4	sɿ^{13}	tsɿ^{34}	tsʰɿ^{13}	zɿ^{13}	mɿ^{13}	pʰɿ^{13}
北京	sɿ^{55}	ti^{51}	tɕʰi^{55}	i^{55}	mi^{35}	pʰi^{35}

*　福岡大学言語教育研究センター外国語講師

*1 青海省で話されている漢語諸方言は北方方言（西北官話）に属する。

*2 青海省の東部に位置する市。本稿で提示する西寧方言のデータはすべて、筆者が実地調査で得たものである。調査に協力して下さったのはいずれも西寧で生まれ育った赵宗洲氏（1946 年生まれ・男性・漢族）、鲁峻氏（1945 年生まれ・男性・漢族）、包维娟氏（1983 年生まれ・女性・漢族）のお三方である。以下に、西寧方言の音声のうち、本稿での議論と関わりがある、韻母の一覧を示しておく：ɿ, ʅ, ʐ̩, ʐ̩ʷ, i, u, ʌ, ɔ, ɛ, ɯ, ɪ, jʌ, wʌ, wɛ, wɪ, ɥu, jɔ, jɯ, ã, jɛ̃, wã, ɥɛ̃, ɒ̃, jɒ̃, wɒ̃, ə̃, jĩ, wə̃, ɥĩ, ɤ̩, m̩, l̩, l̩ʷ.（西寧方言の音声と音韻に関する詳細は川澄 2009 参照）

*3 [ʐ̩]では舌端が隆起するので、厳密さを求めれば「舌端母音」と呼ぶのが適当だが、こ

青海省の 2 方言では、北京方言で舌尖母音が現れる要素（e.g.“私”）にとどまらず、北京方言では狭母音[i]で発音される要素まで舌尖母音[ɿ]、[ʅ]になっているという具合に、広範囲にわたる舌尖母音化が起きている。

青海方言における広範囲の舌尖母音化に関してはこれまでに、王（2006）と、それに対する反論の川澄（2008）が発表されている（両研究の内容は次節にて述べる）。本稿は、川澄（2008）の段階では扱えなかった青海省湟源[*5]の方言データを用いて、川澄（2008）で行った議論を補うものである。

2　先行研究

まず本節では、青海方言の広範囲にわたる舌尖母音化について論じた先行研究 2 種の内容のうち、特に本稿での議論と関わる部分についてまとめておく。

2.1　王（2006）

王（2006）は、青海方言[*6]における広範囲の舌尖母音化は複母音韻母[ei][ie]の単母音[i]への変化が引き金となって起きた現象であると述べる。[ei][ie]が単母音化して[i]に合流し、母音[i]の負担が増加した（＝韻母[i]を有する要素が増加した）ために、これを解消する必要が生じ、元々韻母が[i]であった要素群が舌尖母音化を起こした、と主張する。この考えは以下のように図式

の呼称は通用していないため、本稿では[ʅ]も舌尖母音と呼んでおきたい（漢語文献では、朱 2004：444 などに、和訳すれば「舌端母音」となる“舌叶元音”という用語が見られる）。またこの音声を母音と見る以上、本来は子音用の音声記号で表すべきではないが、適切な母音記号がないため、[ʅ]と表記している（朱 2004：444 ではこの音を“ɨ”と表しているが、ɨは非円唇中舌寄り狭母音を表すのが一般的であるため筆者は用いない）。

*4 青海省にある県の 1 つで、西寧の東約 60km に位置する。本稿で用いる楽都方言のデータは、特に注記しない限り曹・邵（2001）からの引用である。楽都方言の韻母一覧は以下の通り：ɿ, ʅ, ʮ, i, ɑ, ɛ, ɤ, ɔ, iɑ, uɑ, uɛ, ɪi, ui, iɛ, uɤ, yɤ, iɔ, əu, iəu, ã, iã, uã, yã, ɒ̃, iɒ̃, uɒ̃, ɔŋ, iŋ, uəŋ, yəŋ, ṿ, m̩.

*5 青海県にある県の 1 つ。西寧の西およそ 40km の地にある。

*6 王（2006）では、西寧、楽都、湟源、互助、大通の 5 地点の漢語方言を指して「青海方言」と呼んでいる。互助と大通はいずれも西寧の北に隣接する県である。

化することができる（図式化は筆者による）。

【第 1 段階】　[ei][ie]＞[i]
【第 2 段階】　　[i]＞舌尖母音

この図式より、王（2006）は青海方言の舌尖母音化を push chain（押し連鎖）の事例と見ていることがわかる。王（2006）が push chain を支持する主な論拠は、複母音韻母[ei][ie]を保持する方言では広範囲の舌尖母音化が発生していない、というものである。王（2006）は、北京や蘭州（甘粛省）の方言では[ei][ie]が[i]に変化しておらず、[i]の負担が増加していないため、広範囲の舌尖母音化が起きていないと考えている。そしてこれと逆の論理を青海方言に当てはめ、[ei][ie]の[i]への単母音化が広範囲の舌尖母音化を引き起こした要因であると主張している。以下に、今の議論と関わる方言データを王（2006）から抜粋する。表 2 は上述した各方言における韻母[ei][ie]の単母音化の状況、表 3 は舌尖母音化の進行度合を示している。

表 2）（王 2006：362　表 4 の一部）

中古韻	条件	例字	青海	蘭州	北京
微	合口三等非組	微飞肥味	i	ei	ei
麻	開口三等精知影組	爹些姐夜	i	ie	ie

表 3）（王 2006：362　表 3 の一部[北京音は筆者の追加]）

	比	批	米	地	梯	題	鸡	七	西
楽都	pɿ^{53}	pʰɿ^{13}	mɿ^{53}	tsɿ^{24}	tsʰɿ^{13}	tsʰɿ^{13}	tsɿ^{13}	tsʰɿ^{13}	sɿ^{13}
蘭州	pi^{33}	pʰi^{31}	mi^{33}	ti^{24}	tʰi^{31}	tʰi^{53}	tɕi^{31}	tɕʰi^{24}	ɕi^{31}
北京	pi^{214}	pʰi^{55}	mi^{214}	ti^{51}	tʰi^{55}	tʰi^{35}	tɕi^{55}	tɕʰi^{55}	ɕi^{55}

2.2　川澄（2008）

青海方言における広範囲の舌尖母音化を push chain によって説明しようとした王（2006）に対し、筆者は川澄（2008）において 4 つの観点から反論を加えた。ここではそのうち、第 3 節での考察に関わりがある 2 つについて再掲しておきたい。

2.2.1　楽都方言のデータから

1 つ目は楽都方言のデータに基づいた反論である。楽都方言では、先掲の表 3 にあったとおり広範囲にわたる舌尖母音化が発生している。その一方で、王（2006）が舌尖母音化の要因として挙げる、[ei][ie]＞[i]という単母音化は起きておらず、ei は[ɪi]、ie は[iɛ]のように、複母音の状態を保っている。

・ei＞[ɪi]　e.g. 妹[mɪi^{34}]、飞[fɪi^{13}]、威[vɪi^{13}]
・ie＞[iɛ]　e.g. 铁[t^{h}iɛ^{13}]、姐[tɕiɛ^{53}]、爷[iɛ^{13}]

王（2006）の主張と関連する各音声の楽都方言での現状をまとめると表 4 のようになる。

表 4）

舌尖母音	単母音	複母音
[ɿ]	なし	[ɪi][iɛ]

このデータは、楽都方言における広範囲の舌尖母音化が、王（2006）の言う[ei][ie]の[i]への単母音化とは無関係に発生したことを示している。

2.2.2　西寧方言のデータから

楽都方言とは異なり、西寧方言では複母音韻母 ei、ie の単母音化が発生しており[*7]、表 5 に挙げた関連韻母の現状だけを見れば、push chain が起きたと考えることも不可能ではない。

表 5）

舌尖母音	単母音	複母音
[ɿ][ʅ]	[i]	なし

しかし川澄（2008）では、通時的な側面から考察すると、西寧方言についても push chain は想定しづらいことを明らかにした。川澄（2008）が王（2006）への反論に用いたもう 1 つの論拠は、中古音（『広韻』）と西寧方言現代音の対応関係に基づくものである。

西寧方言で[i]および舌尖母音を韻母とする各字を、中古音で所属する韻目に従って分類してみると、以下のようになる[*8]。

＊[i]を韻母とする字が所属する韻目：

皆韻・戈韻・麻韻・月韻・屑韻・薛韻・葉韻・帖韻・業韻

例字）介[tɕi^{44}]（皆韻）/茄[tɕ^{h}i^{24}]（戈韻）/爷[i^{24}]、姐[tɕi^{44}]、且[tɕ^{h}i^{44}]、写[ɕi^{44}]、野[i^{44}]、借[tɕi^{24}]（麻韻）/歇[ɕi^{44}]（月韻）/铁[t^{h}i^{44}]、切[tɕ^{h}i^{44}]、结[tɕi^{44}]（屑韻）、

---

*7 但し王（2006）の言う“[ei][ie]＞[i]”とは若干異なり、西寧方言では“ei＞[ɪ]”、“ie＞[i]”という、2 種類の単母音化が起きている。
e.g. 妹[mɪ^{24}]、飞[fɪ^{44}]、威[uɪ^{44}]/铁[t^{h}i^{44}]、姐[tɕi^{44}]、爷[i^{24}]

*8 川澄（2008）では、例えば“東・董・送”の 3 韻目のような、声調のみが異なる韻目は一括りにして扱いたかったため、入声韻以外の韻目名は原則として平声のそれを代表させて用い、相配する平声・上声がない場合のみ去声の韻目名を用いた。本稿でも引き続きこの記述法をとりたい。

杰[tɕi^{24}]（薛韻）/接[tɕi^{44}]（葉韻）/帖[tʰi^{44}]、协[ɕi^{24}]（帖韻）/业[ni^{44}]（業韻）

＊舌尖母音を韻母とする字が所属する韻目：

支韻・脂韻・之韻・微韻・斉韻・祭韻・昔韻・職韻・緝韻

例字）皮[pʰɿ^{24}]、枝[tsɿ^{44}]、骑[tʂʰɿ^{24}]、避[pɿ^{24}]、寄[tʂɿ^{24}]、义[ɿ^{24}]、戏[ʂɿ^{24}]（支韻）/眉[mɿ^{24}]、私・狮[sɿ^{44}]、指[tsɿ^{44}]、屁[pʰɿ^{24}]、鼻[pɿ^{24}]、器[tʂʰɿ^{24}]（脂韻）/词[tsʰɿ^{24}]、旗[tʂʰɿ^{24}]、医[ɿ^{44}]、柿[sɿ^{24}]、齿[tsʰɿ^{44}]、喜[ʂɿ^{44}]、记[tʂɿ^{24}]（之韻）/机[tʂɿ^{44}]、衣[ɿ^{44}]、汽[tʂʰɿ^{24}]（微韻）/批[pʰɿ^{44}]、迷[mɿ^{24}]、低[tsɿ^{44}]、提[tsʰɿ^{24}]、西[ʂɿ^{44}]、鸡[tʂɿ^{44}]、闭[pɿ^{24}]（斉韻）/币[pɿ^{24}]、艺[ɿ^{24}]（祭韻）/夕[ʂɿ^{44}]、译[ɿ^{24}]（昔韻）/媳[ʂɿ^{24}]、饰[sɿ^{24}]、极[tʂɿ^{24}]（職韻）/急[tʂɿ^{24}]、吸[ʂɿ^{44}]（緝韻）

上掲のデータは、王（2006）の主張に再考の余地があることを示している。仮に王（2006）の述べるように複母音韻母 ie が[i]に合流し、一旦[i]をもつ要素が増加した後に舌尖母音化が起きたのであれば、新たに韻母[i]になった要素（＝本来韻母が ie であった要素）も舌尖母音化の影響を受けるはずである[*9]。その結果、皆・戈・麻・月・屑・薛・葉・帖・業の各韻に所属する要素も舌尖母音化するのが自然である。しかし実際にはそのような変化は起きていない。この事実から、西寧方言において ie 由来の[i]と元々の[i]が合流、併存した時期はなかったことがわかる。そして西寧方言の舌尖母音化プロセスに対しては、王（2006）の主張とは逆の、以下のような drag chain（引き連鎖）を想定するのが適切だと言える。drag chain であれば、西寧方言の現状を無理な

[*9] 2.1 節で述べたように、王（2006）は複母音韻母が単母音化して[i]に合流した後に、元々韻母が[i]だった要素のみが舌尖母音化を起こしたと想定しているが、この考えは非現実的である。ひとたび合流してしまえば、かつて複母音韻母であった要素と元から[i]であった要素の区別はできなくなるので、韻母 i を有する要素は一律に舌尖母音化するはずである。

く説明することができる。

【第 1 段階】　　i＞[ɿ][ʅ]
【第 2 段階】　ie＞[i]

2.2.3　小結

以上のような議論に基づいて川澄（2008）は、青海方言における広範囲の舌尖母音化は push chain の事例と見るべきではないと結論付けた。但し、川澄（2008）で検討を加えることができたのは青海方言のうち楽都方言と西寧方言のみで、王（2006）が言及するその他の湟源、互助、大通の 3 方言についてはデータ不足で扱えず、今後の課題として残していた。その後、中国の学術雑誌『方言』（2011 年第 1 期）に湟源方言の音声特徴を記述した芦（2011）が発表されたので、本稿ではそのデータを用いて青海方言の広範囲にわたる舌尖母音化について再度考察してみたい。

3　湟源方言における広範囲の舌尖母音化

3.1　関連する韻母の現状

湟源方言で使われる韻母は全部で 31 種類ある*[10]。このうち、本稿の議論と関わりがあるのは[ɿᶻ][iᶻ][i]の 3 つである。芦（2011：69）が掲げる韻母一覧表によれば、これら 3 韻母は以下のような要素に現れる。

[ɿᶻ]…资・支・第　[iᶻ]…姐・野・你・噎　[i]…悲・美・蛇・遮

*[10] ɿᶻ, ʅᶻ, iᶻ, ɥᶻ, i, u, a, ɔ, ɛ, ɯ, ia, ua, uɛ, ui, yu, iɔ, iɯ, æ̃, iæ̃, uæ̃, yæ̃, ɔ̃, iɔ̃, uɔ̃, ə̃, iə̃, uə̃, yə̃, ṿ, l̩, l̩ʷ. 右肩に摩擦音の記号が付いているものは、強い摩擦的噪音を伴う韻母であるという。

北京方言では韻母[i]である“第”が舌尖母音化している点から、湟源方言でも広範囲にわたる舌尖母音化の起きていることがわかる。また、湟源方言で[iʶ][i]を韻母とする例字が『中原音韻』の再構音*11では複母音韻母を有していたとされる点を考えると、湟源方言において複母音韻母の単母音化が発生したこともわかる。そのため、上記データの範囲内では、湟源方言の広範囲にわたる舌尖母音化に対してpush chainを想定することも可能であるように見える。では、より多くのデータを取り込んで考察を進めた場合、どのような結論が得られるであろうか。

3.2　通時的考察

芦（2011）が提示する同音字彙（homophony syllabary）からは、湟源方言における広範囲の舌尖母音化がどのように進行したかを検討する際に有用なデータをいくつか見出すことができる。本節ではそれらを利用して、通時的観点からの考察を加えていきたい。

3.2.1　『中原音韻』車遮韻所属字の現状に基づく考察

まず参考になるのが、『中原音韻』で韻母iεが再構される字、つまり車遮韻所属字の現状である。以下に、車遮韻所属字の湟源方言における発音を示す*12。

奢・赊[ʂi^{44}]、车[tʂʰi^{44}]、遮[tʂi^{44}]、爹[ti^{44}]、些[ɕiʶ^{44}]、爷・耶[iʶ^{24}]、邪・斜[ɕiʶ^{24}]、蛇・佘[ʂi^{24}]、协[ɕiʶ^{213}]、穴[ɕiʶ^{24}]、杰[tɕiʶ^{24}]、叠・谍・蝶[ti^{24}]、折[tʂi^{5}]　[ʂi^{24}]、舌[ʂi^{24}]、涉[ʂi^{5}]、捷・截[tɕiʶ^{24}]、别[piʶ^{24}][piʶ^{0}]、野・也[iʶ^{5}]、

*11『中原音韻』の再構音は杨（1981）に依る。杨（1981）では“姐”“野”“噎”“蛇”“遮”の韻母にはiεを、“悲”“美”の韻母にはueiを再構している。なお例字のうち“你”には単母音韻母iが再構され、ここでの議論に合わないが、“你”が例外的な音韻変化をする事例は様々な方言で確認されている。
*12芦（2011）では“˥˨”などの声調記号を用いて声調を表記しているが、本稿ではそれらを数字に置き換えて引用する。

者[tʂi^{5}]、写[ɕiᵊ^{5}]、泻[ɕiᵊ^{213}]、捨・舍[ʂi^{5}]、惹[ʐi^{5}]、扯[tʂʰi^{5}]、姐[tɕiᵊ^{5}]、且[tɕʰiᵊ^{5}]、屑[ɕiᵊ^{5}]、泄[ɕiᵊ^{24}]、切[tɕʰiᵊ^{44}]、妾[tɕʰiᵊ^{24}]、泻[tsʰɿᵊ^{44}]、结・劫[tɕiᵊ^{44}]、怯[tɕʰiᵊ^{44}]、客[kʰi^{44}]、节・接[tɕiᵊ^{44}]、血・歇・蝎[ɕiᵊ^{44}]、铁・帖・贴[tʰiᵊ^{44}]、撇[pʰiᵊ^{44}]、鳖[piᵊ^{44}]、辙[tʂi^{24}]、撤[tʂʰi^{44}]、哲[tʂi^{24}]、褶・摺[tʂi^{44}]、浙[tʂi^{44}]、设[ʂi^{5}]、摄[ʂi^{213}]、社・射・赦・麝[ʂi^{213}]、谢・卸[ɕiᵊ^{213}]、夜[iᵊ^{213}]、借[tɕiᵊ^{213}][tɕʰiᵊ^{5}]、趄[tɕʰiᵊ^{5}]、捏・镊[niᵊ^{44}]、聂・蹑[niᵊ^{24}]、灭[mi^{44}]、篾[mɿ^{24}]、噎・叶[ɕiᵊ^{44}]、业[niᵊ^{44}]、裂・猎・列[li^{44}]、热[ʐi^{44}]

“泻”“篾”の2字は舌尖母音を有するが、湟源方言では原則、『中原音韻』で韻母 iɛ をもつと再構される字は韻母が[iᵊ]または[i]になっている*13。この現状は王（2006）の見解に対する反例であると言える。広範囲の舌尖母音化が iɛ の単母音化より先に起きていたと想定しなければ、車遮韻所属字の大部分が舌尖母音化していない事実は説明できない。まず広範囲の舌尖母音化が起き、その後に車遮韻所属字が単母音化した。更にその後、車遮韻所属字のうち“泻”“篾”の2字が例外的に舌尖母音に変化したと考えられる*14。

3.2.2 『中原音韻』齊微韻所属字の現状に基づく考察

杨（1981：99）では、『中原音韻』齊微韻所属字の一部に対して韻母 ei を再

---

*13 なお韻母[jᵊ]・[i]への分かれ方には中古音の条件に基づいた一定の規則性がある。例えば屑韻所属字（穴・截・屑・切・结・节・血・铁・撇・捏・噎）は原則[iᵊ]になる（例外：跌）。或いは麻韻所属字のうち、声母が章組の字（奢・赊・车・遮・蛇・佘・者・捨・舍・扯・社・射・赦・麝）は[i]になる一方、精組（些・邪・斜・写・泻・姐・且・谢・卸・借）と以母（爷・耶・野・也・夜）の字は[iᵊ]になっている。議論の本題ではないのでその他の事例については割愛する。

*14 北京方言を基礎とする普通話では“泻”に[tɕʰi^{55}]という音がある。普通話の韻母[i]には湟源方言で韻母[ɿᵊ]が対応するので、普通話との共時的対応という観点から見れば“泻”が湟源方言で[tsʰɿᵊ^{44}]と読まれるのは規則的であると言える。なお『広韻』で「千結切」小韻に属する“泻”がなぜ現在の普通話で[tɕʰi^{55}]という音を持つのか正確な理由はわかっておらず（神戸市外国語大学太田斎教授のご教示）、普通話においても“泻”は特殊な音韻変化の事例であると言える。

構している。それらの字の湟源方言現代音を以下に示す。

賊[tsi^{24}]、德・得[ti^{44}]、黑[xi^{44}]、肋[li^{44}]

この現状も、前節の事例同様、王（2006）の見解と相容れないものである。ei が[i]に単母音化した後に広範囲の舌尖母音化が発生したのであれば、上に挙げた各要素も舌尖母音化の影響を受け、韻母[i]ではなくなっていなければならない。

3.2.3 『広韻』脂韻所属字の現状に基づく考察　ー「重紐」の痕跡

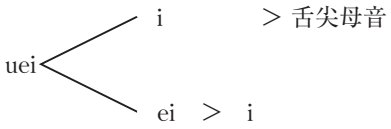
続いて、『広韻』で脂韻に所属する字の現状から見出せる事実を述べる。脂韻所属字の湟源方言における発音は以下の通りである。

鄙・篦[pɿ^{z44}]、比・秕・庇[pɿ^{z5}]、备・鼻[pɿ^{z213}]、辔[p^{h}ɿ^{z44}]、琵・枇[p^{h}ɿ^{z24}]、屁・痹[p^{h}ɿ^{z213}]、秘・泌[mɿ^{z44}]、眉・楣・媚・寐・尼[mɿ^{z24}]、腻[mɿ^{z213}]、资・姿・咨・旨・饥・肌・季[tsɿ^{z44}]、姊・脂・指・几[tsɿ^{z5}]、地・自・冀[tsɿ^{z213}]、瓷・迟・祁・鳍・弃[ts^{h}ɿ^{z24}]、次[ts^{h}ɿ^{z5}]、器[ts^{h}ɿ^{z213}]、私・师・狮・视[sɿ^{z44}]、尸[sɿ^{z24}]、死・矢・屎[sɿ^{z5}]、四・肆・示・嗜[sɿ^{z213}]、伊[ɿ^{z44}]、夷・姨[ɿ^{z24}]、肆・遗[ɿ^{z213}]、悲[pi^{5}]、霉[mi^{24}]、美[mi^{5}]、谁[fi^{24}]、水[fi^{5}]

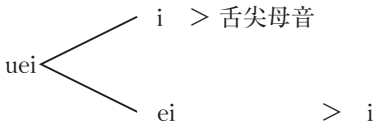
大部分の要素が韻母[ɿ^{z}]になっているが、“悲”“霉”“美”“谁”“水”の5字は韻母[i]を有する。このうち舌尖母音化プロセスの検討に役立つのは“悲”“霉”“美”の3字である*15。“悲”“霉”“美”の韻母が[i]になっているのは、

*15 本節の議論とは関わらないが、残りの“谁”“水”についても簡単に言及しておきたい。“谁”“水”は中古音で合口韻母であるが、脂韻合口韻母の要素は湟源方言では[i]でなく[ui]になるのが原則である（e.g. 泪[lui^{213}]、龟[kui^{44}]、唯[ui^{24}]、追[tʂui^{44}]）。しかし

これらがいわゆるB類（重紐三等）字に該当することと関連があるだろう。つまり湟源方言の脂韻幇組字には部分的に重紐の区別が反映されていると考えられ、A類（重紐四等）字は必ず[ɿʿ]であるのに対し、B類字は[ɿʿ]または[i]となっている。韻母[i]の増加が広範囲の舌尖母音化を誘発したとする王（2006）の枠組みでは、下図のように、複母音韻母（ei）であったB類字がiへと単母音化した後、韻母iを有するB類字に舌尖母音化が発生したということになるだろう。



仮にこれが事実だとすれば、B類字はA類字同様すべて韻母[ɿʿ]となり、湟源方言に重紐の痕跡は残らないはずである。これに反しわずかではあるが重紐の区別が反映されている現状を説明するためには、以下のような順序を想定した方が自然であると考える。



3.2.4 小結

本節で述べた3つの事例から、湟源方言における広範囲の舌尖母音化は、複母音韻母の単母音化よりも早く発生していたと考えるのが適切であると言える

青海省の諸方言では“ṣu”の連続が[f]になるという音変化が発生したため、“谁”“水”は脂韻合口字でありながら韻母が[i]になっている。

だろう。

4 結

以上本稿では、湟源方言のデータを追加して、青海方言における広範囲の舌尖母音化について論じた先行研究 2 種の妥当性を検討した。その結果、湟源方言においても、王（2006）の考えではうまく解釈できない事例のあることが明らかとなった。一方、それらの事例はいずれも、川澄（2008）が西寧方言に対して提案したような drag chain であれば説明することが可能である。湟源方言についても、まず i が舌尖母音化し、その結果空き間（gap）となった i の位置を埋めるために複母音韻母が単母音化したという音変化の過程を想定したい。

参考文献

曹志耘・邵朝阳（2001）「青海乐都方言音系」『方言』2001-4, pp. 373-383.

川澄哲也（2008）「从拉链的角度看青海方言元音[i]的舌尖化音变　－兼与王双成先生商榷」『京都大学言語学研究』27, pp. 213-222.

-------（2009）「西宁方言的音段音系学」『京都大学言語学研究』28, pp. 91-112.

芦兰花（2011）「青海湟源方言音系」『方言』2011-1, pp. 68-79.

王双成（2006）「青海方言元音[i]的舌尖化音变」『中国语文』2006-4, pp. 359-363.

杨耐思（1981）『中原音韵音系』中国社会科学出版社.

朱晓农（2004）「汉语元音的高项出位」『中国语文』2004-5, pp. 440-451.

［付記］　本研究は日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（A）「地球化時代におけるアルタイ諸語の急速な変容・消滅に関する総合的調査研究」（課題番号　21251006；研究代表者：久保智之）の援助を受けている。